■研究発表論文

都心部公園における花壇ボランティア小団体への参加者の活動体験

Experiences of members' activities of a small group of a community flower garden at a municipal park in a central metropolitan area

矢部　恒彦*

Tsunehiko YABE

Abstract: Many amateur Japanese gardeners use small semi-public spaces to grow their favorite plants. These activities may be a kind of community development, but they do not always intend to contribute to such development. On the other hand, amateur gardeners have their own experiences and desires. What are the kinds of experiences contributing to building public space? Starting from this research question, the author conducts a case study on a semi-organized group at Shiba Municipal Park. From 2004, this group has been looking after and growing plants every Saturday morning as a volunteer activity, and then they keep a small flower garden to contribute to the local landscape of central Tokyo. The result of category relations shows the experiences as follows: the experiences of the members show a trend to deepen as they converge their way and knowledge of gardening. Then the experiences divide into two trends of deepening, one is the desire for the park to be appreciated and the other is a desire to look after and develop the park. The former experiences are easy to support and evaluate by local government, while the latter are important for the continuation of the group but difficult to support.

Keywords: *municipal area, floriculture, volunteer work, research interview, qualitative analysis*
キーワード：都心部，花壇づくり，ボランティア活動，インタビュー調査，質的分析

１．はじめに

（１）研究の背景と事例研究の対象

都市公園におけるボランティア園芸活動の導入は，植栽の維持管理コストを低減させると同時に，市民に生きがいを供している。多くの市民にとって，園芸活動は手軽に参加しやすいうえ深みのある趣味となりうる。さらに，住宅庭園の少ない都心部において，公園を開かれた緑地として位置づければ，ボランティア活動は，市民に貴重な園芸機会を与えているとも言えよう。

しかし，維持管理と，市民の「生きがい」は常に両立するわけではない。植栽に関わる公園業務は，ボランティアの他にもシルバー人材事業など様々な業務委託形式をとって有償の園芸活動となりうるものである。では，どのような時に，それは両立するのだろうか。

このような興味関心を背景として，本稿では，大都市都心部の公園において，NPO 設立などの組織化をせず，一方で強力なリーダーも持たないまま，継続的に花壇づくりを続けたボランティア市民グループ活動に着目する。

（２）既往研究と研究の目的

公園での花壇ボランティア園芸活動について，既往研究では，参加者の動機づけの一端が明らかにされている。林らは，園芸ボランティアによる花壇づくりでのアクション・リサーチを行い，造園家・管理者の支援の重要性を明らかにするとともに，参加者の楽しみとして一年草の開花を報告している[1]。御手洗らは，都市空間における園芸ボランティア団体複数のメンバーに対しての定量的な意識調査を行い，花壇づくりを主目的とする団体に所属するメンバーの多くが，健康づくりとともに園芸活動そのものを目的としていることを示している[2]。

以上のような公園内での明瞭・限定的な園芸活動のほかに，様々な都市空間における住民の自発的な園芸活動も調査研究されてきた。大藪らは街路空間における自発的な植物栽培について意識調査を行い，回答者の多くが植物栽培が「好き」で，栽培の理由について街路の美化とともに「栽培スペース不足」「見てもらいたい」「ただ植えたかった」など，園芸活動そのものへの興味により活動していることを示している[3]。

では，自発的な趣味としての園芸活動とはどのように体験されているのか。矢部は，住宅庭園についてのウエブ・ブログの質的調査をおこない，新築住宅オーナーの庭づくり体験を記述している。体験は，その庭の植物を「育てる」体験，庭の景色を「賞でる」体験に大別された[4]。この枠組みを参考にして，本稿では都心部の公園でボランティア活動を行う小団体の事例調査を行う。そして，人々のなかで優勢な意見を集約するのではなく，なるべく広くの意見を集め，少数意見まで含めて把握することに優れた質的調査の手法を用いて，公園ボランティア園芸における活動体験の詳細を記述する。これを経緯・現況と組み合わせ，ボランティア参加者はどのように園芸活動を体験し，どのような公園づくりを志向しているのかを明らかにすることを目的とする。

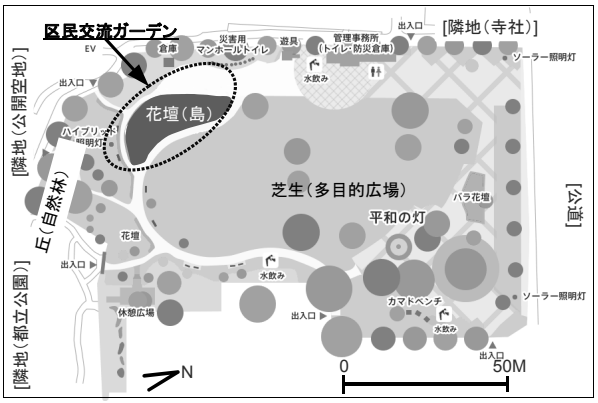
２．事例調査の対象と分析手順

（１）港区立芝公園と「港区民交流ガーデンクラブ」の概要

港区立芝公園（以下芝公園と省略）は東京都心部に位置する都市公園である。隣接する明治期開園の都立公園，大規模な寺社敷地，ホテル公開空地とあわせ大規模な緑地帯を形成している。芝公園は，緑地帯のなかでは比較的あたらしく 2007 年に全面開園した（表－1）。公園面積は 1ha 強であるが，敷地東側は東京湾岸につづく平地，西側は古墳の端部となる高さ 10m 程度の丘となり変化のある微地形をもつ（図－1）。また，隣接する寺社は江戸時代からの古刹であり，交通至便ともあいまって，公園には，近くのオフィスからの来訪者のほかに，国内外の観光客が訪れている。

港区芝支所管内は，用途地域の多くが商業地域に指定された高密度地区であり，緑地帯の周囲には中高層のオフィス・ビル群が形成されている。しかし，江戸時代から現在まで続いた居住地でもあり，活発といえる町内会活動も続いている。ただし，芝支所管

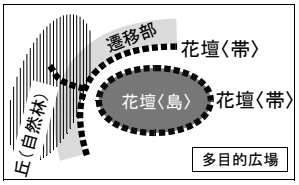
*法政大学社会学部



図－1　区立芝公園配置図

表－1　区立芝公園の概要

面積	13522 ㎡
暫定開園	2002 年
前面開園	2007 年



図－2　区民交流ガーデン概略図

花植えイベント準備【花壇〈帯〉】　　棚づくり【遷移部】

図－3　クラブ作業風景

表－2　調査概要

インタビュー調査（1）	
期間	2013 年 3 月～2014 年 3 月
人数	8 人
概要	オープンエンド・インタビュー
インタビュー調査（2）	
期間	2015 年 9 月～2016 年 4 月
人数	9 人　※インタビュー（1）と重複あり
概要	下記アンケート調査と同時に、半構造化インタビュー
小規模アンケート調査	
期間	2015 年 9 月～2016 年 4 月
人数	14 人
概要	A4 表裏、14 項目、現地にて対面式で回答記入

内の昼夜間人口比率は 12.0 倍（2010 年）[5]と高く，在勤者と比べ居住者が非常に少ない。さらに，65 歳以上人口比率も 18.9%（2016 年）[6]となり，高齢化が進んだ地域であることが特徴である。高齢化は現代の都心部に共通する人口動態であろう。

芝公園では，児童遊具区画・管理施設の面積は極めて小さく，敷地はおもに舗装広場（東側道路沿い），芝生広場（中央），自然林（西側丘）で三分割されている。これは港区民祭りや東京マラソンなどのイベント時での仮設会場，さらには防災を念頭においた「余白」[7]ある公園計画である。

事例調査対象となる「港区民交流ガーデンクラブ」（以下，クラブと省略）の活動場所は，芝生広場と自然林のあいだに設置された長辺約 30m の楕円形区画周辺である（図－2）。現在は，楕円形区画の周縁部・遊歩道端部にある帯状花壇（以下，花壇〈帯〉と省略）において一年草苗・球根等の栽培，楕円形区画の中央部（以下，花壇〈島〉と省略）や，遊歩道端部の花壇の背後と自然林のあいだ（以下，遷移部と省略）において宿根草・低木等の栽培を行っている（図－3）。

毎週土曜日午前に定例作業を行い，会合はその作業直前に行う。また，公園指定管理者と相談のうえ花卉苗や肥料・用具等が無償支給されている。

なお，現在区では，公園維持・管理での住民協働が積極的に導入されているが，クラブは，その嚆矢として 2002 年に発足している[8]。また，同クラブ以外にも，芝公園では 2016 年現在，港区アドプト・プログラムにより「アドプトあけのみ」がバラ花壇，指定管理者指導により「公益社団法人日本アロマ環境協会」がハーブ花壇についての活動を行っている。

（2）事例調査・分析の手順

クラブは 10 年以上存続しているが，構成員：区在住・在勤者に限定，作業時間：毎週土曜日午前中に 2 時間，会費：作業時のお茶代などで年 2000 円などが定められた会則以外，文章化された規則や活動指針はない。このように緩やかな小団体を調査するため，著者は 2012 年より継続してクラブの園芸作業に参加し，作業後の「お茶のみ」の時間などを利用して，現場でインタビュー調査とアンケート調査を行った（表－2）。

2013～2014 年：インタビュー調査（1）は，オープンエンド形式で，インフォーマントに話題をまかせ，著者は話を傾聴するように留意した。また，この段階でインタビューの話題を整理して以降の調査の参考とした。インタビュー時間平均は 38 分，合計時間は 301 分である。2015～2016 年：インタビュー調査（1）での話題から質問項目を調整して，小規模アンケート調査を企画した。これは現場で，すべて対面形式で調査をおこない，クラブ活動の現況の概要を明らかにした（4 章）。アンケートの実施と同時に，時間の取れるインフォーマントに対してはテープ録音を依頼しアンケート項目を質問形式で問いかけ，半構造化インタビュー[9]調査（2）を行った。こちらのインタビュー時間平均は 11 分，合計時間は 105 分である。

ふたつのインタビューの録音データは文字起こしを行い，適切な長さに切片化した文字テクストとした。この文章切片の記述内容からクラブ活動の経緯を明らかにし（3 章），さらに質的分析を行ってクラブ員たちの活動の詳細を記述した（5 章）。

以上から，クラブの活動の経緯とクラブ員の活動体験などを明らかにした。

3．クラブの経緯

（1）過去活動の整理手法

著者が活動参加した 2012 年以降，クラブの作業内容・場所・人数等について大きな変化はなく，活動は安定期に入っていることが示唆された。そこで，インタビューデータからクラブの過去に言及した文章切片をまとめ，活動年表を作成した（表－3）。活動の経緯は芝公園の整備進捗にしたがって 3 分割，さらに全面開園後を分けて 4 期にまとめることができた。以下に経緯を列挙する。

（2）1 期：管理・運営団体としての発足

2002 年，公園の暫定開園とあわせ，区は「港区民交流ガーデン事業」を開始し，参加区民の運営会議としてクラブが発足した。活動は，クラブ・区・公益財団法人都市緑化機構から派遣された造園業者による花壇の管理・運営方針づくり，これに加えて園芸作業だった。障碍者センターから派遣された障がい者も作業参加した。活動場所となる花壇は現在よりも面積が狭く，球根などの一年草のみの簡便な花壇だった。発足時のクラブは，花壇の管理運営を受託できる区民組織を目指していたと位置づけられよう。

表−3　クラブ年表

時期	1期	2期	3A期	3B期
	管理・運営団体としての発足	**園芸場所・時間の確定**	**園芸内容の確定**	**活動の深化**
	2002～2004年	2004年～2006年	2007年～	2009年頃～
概要	2002年4月：X区立A公園が一部開園 「X区民交流ガーデンクラブ」が区の呼びかけにより発足。区立障害福祉センターに作業依頼／障がい者＋クラブ員で園芸作業	2004年9月～2005年1月：A公園ワークショップ／公園基本計画作成のため隔月開催 クラブ活動は、1期より継続／2005年夏：障がい者園芸作業が終了	2006年11月～2007年4月：整備のため閉園 2007年4月：全面開園	2009年4月：造園業者Cさんがガーデン担当 2015年4月：指定管理者制度の導入（ガーデンも同一業者が担当）
方針ぎめ	区役所で夜間月1回＋不定期会合 担当係長と区職員＋（公財）都市緑化基金より造園業者＋クラブ員が出席	→夜間会合（継続）	夜間会合を廃止 クラブ員会合は土曜日作業前／総会も年一回4月第1回の作業前に設定 必要なときには電話で相互連絡	クラブ員相互の電話・メール連絡が活発化
園芸活動	緑化基金からの業者指導により作業／一年草の植付と管理クラブ員作業は月1・2回／参加者は10名以下／一部は主的に水やり／活動は秋まで、冬季は花壇放置／作業中心は派遣障がい者、週数回のときも	土曜日午前2時間、クラブ員作業が定例化 一年草の植付と世話	一年草の植付と世話 宿根草・低木の植付、移植、世話	→一年草＋宿根草・低木（継続） 水撒き等の作業を、指定管理業者に委託
花壇の種別	長円形花壇：平坦な長円形、一年草	→長円形花壇（継続）	花壇〈島〉：楕円形ガーデン区画の中央部、宿根草・低木 花壇〈帯〉：ガーデン区画の端部＋遊歩道横約1mの帯状部分、一年草	→花壇〈島〉、花壇〈帯〉（継続） 遷移部：花壇〈帯〉背後と自然林の中間部／宿根草・低木等
花壇の形状	長円形花壇の全面に一年草 現在よりも狭く、設置場所はやや異なる 水道は未整備	「公園基本計画」策定 WS期間中一貫して楕円形「交流ガーデン」区画が盛り込まれて最終案へ	花壇〈島〉の築山・土止めなど形状は、クラブ員が作業をしながら造園業者と修正 中木は開園時に植付、低木・宿根草はクラブ員が順次／土づくりもクラブ員	遷移部は花壇〈島〉〈帯〉の作業と同時にクラブ員作業で開墾 花壇〈島〉＋遷移部を利用して場所をえらび、宿根草・低木を移植
イベント		年2回の区民参加花植えイベント開始	花植えイベント 他ガーデンのビデオ勉強会	花植えイベント、クラブ員親睦イベント
外部キーパーソン		区職員Aさん：WS参加	「すごく詳しい」区職員Aさん。クラブと行政の橋渡し。休日も子供連れで現場を訪問／造園業者B先生：隣接する公開空地の造園家	「コミュニケーションをうまく」とってくれる造園業者Cさん。クラブ員主導の作業方針を支援
受賞	2004年：緑化基金「緑のデザイン賞」			2014年：緑化基金「継続優良賞」

（3）2 期：園芸場所・時間の確定

2004 年～2006 年，クラブとは別個に区民公募で公園基本計画作成ワークショップが開催された。WS には数名のクラブ員も個別参加し，途中経過でも一貫して「交流ガーデン」区画が設定されていた。この間，クラブは 1 期と同様の活動を継続しているが，2005 年夏ごろに障がい者の作業が停止している。これを受けて園芸作業はすべてクラブ員が担当することになり，現在までつづく毎週土曜日の活動時間が確定した。また新規クラブ員勧誘の効果もある区民参加の花植えイベントが開始され，この時期，作業団体としてのクラブが確定した。

（4）3A 期：園芸内容の確定

2007 年に芝公園が全面開園する。WS の基本計画どおりに，花壇区画の平面型・中木植樹が確定したうえでクラブ活動が再開する。園芸作業の対象は，花壇区画の中央部である花壇〈島〉と区画端部および遊歩道わきの約 1m 幅の花壇〈帯〉となる。花壇〈帯〉では引きつづき一年草苗等の植付けと世話，花壇〈島〉では，築山や土止めとともにクラブ員が土づくりを行い，宿根草や低木を植付けて世話を行うようになる。現在に続く活動内容の確定期である。

またこの時期，区役所定例会が終了し，現場打合せでクラブの方針が決定されるようになり，会員相互の連絡も活発になる。

（5）3B 期：活動の深化

3A 期を引継ぎ花壇〈帯〉で一年草の植付と世話がつづく一方，花壇〈島〉での宿根草・低木の世話と土づくり作業は，植物の移植を繰り返しながら場所を拡張し，それは，花壇〈帯〉背後と自然林の中間部である遷移部までに至る。クラブ員により土地が開墾された遷移部は，花壇〈島〉より目立たない場所のため，クラブ員は思い思いに草木を選び栽培している。

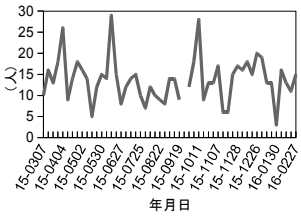
（6）小括

以上のようにクラブは園芸活動を深化させた。各期をつうじた着目点は，i. 活動の方針ぎめについて自律性を高めたこと，ii. 自律性が高まるとともに，一年草に対する一律の全員作業だけなく，宿根草・低木の世話という個別作業が増えたことである。この深化にともなって，現在では，遷移部でも園芸活動が行われるようになった。

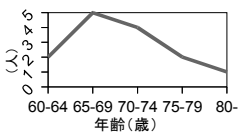
4．クラブ員の活動状況

各調査の前提として，園芸作業への参会者数を確認した（図−4）。欠測日 1 日をのぞいた年間の平均参会者は 13.6 人である。年 2 回，クラブ員以外の市民に参加してもらう花植えイベントへの参会者は 30 人近く，ついて 4 月第一土曜日に行われるクラブ総会の参会者が 20 人を超える一方，平常時の参加者は 10 人台となる。また，参会者が少ない月日は，いずれも雨雪など天候不順時であり，夏季にも参会者が減少する傾向がある。

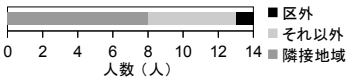
つぎに，アンケート調査を集計してクラブ員の傾向をまとめた。年齢構成では 65 歳～69 歳が最多で（図−5），女性比率は 57%であった。居住地は公園から半径 1km 以内の隣接地域が最多で，1 名を除きすべて港区在住者であった（図−6）。現住所への在住歴は全員が在 10 年以上で，成人期以降すべて現住所と見なせる在 40 年以上の者が半数以上となる（図−7）。園芸活動歴については，年少期から活動を継続したと見なせる 60～69 年間の者が最大であるのに対して，成人期以降の様々な時期に園芸を開始した者も存在する（図−8）。なお，自宅屋外（57%）や自宅ベランダ（57%），



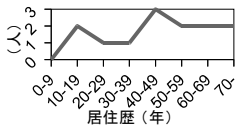
図−4　年間のクラブ参会者数



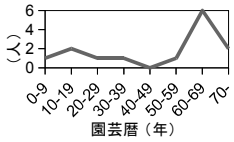
図−5　参会者の年齢構成



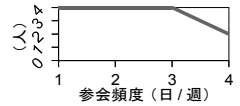
図－6　参会者の居住地



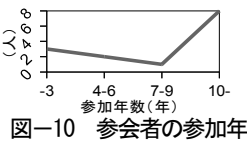
図－7　参会者の居住暦



図－8　参会者の園芸暦



図－9　作業への参加頻度



図－10　参会者の参加年数

表－4　切片とコードの例

話者	文章切片	大コード	中コード	小コード
E	そんなに毎日来られないじゃん。それこそほんと、ボランティアだから。これだけ私たちが作業したら、役所はいくら予算もらわなきゃいけないの、なんて冗談でよく言うけどね。まともにこれ業者に頼んだら、すごいでしょ。皆、暑いのによく来るなって感心してるの、わたし。	作業	集団作業	維持作業の負担感
B	やっぱり、皆さんテクニックのレベルが上がったと思いたいけど。遠慮もあったんだろうし、なにをやっていいかわからなかったっていう、まとまりもなかったっていうのか。だけど、今はわりと和気あいあいと皆さんやってるじゃないですか、それなりに意見はたくさんあるみたいだけれども。だから、まあ、花壇として見られるようになったろうと思うし。	作業	方向性の収れん	

他の区民協働花壇（21%）など，クラブ以外でも園芸活動をしている者が多い。「年平均として」質問した土曜日作業への参会頻度は，月 1～4 回まで一様に分布した（図－9）。なお 57%が定例の土曜日以外にも作業を行っていた。また，参加年数は 10 年以上，つまりクラブ創立メンバーが最多となる一方，続いて 3 年以下の新参者が多いことが明らかになった（図－10）。

5．クラブ員たちの活動体験の詳細

（1） 質的分析の方法と第一段階のコーディング

本章では，インタビュー調査によって得られた文章切片についての質的分析を行う。質的分析は様々な手順が提唱されているが，総じて，段階的・帰納的に元データを捨象しながら整理・統合しカテゴリを構築していく点に特徴がある [10]。質的分析は，体験としての活動，つまり人々が活動をしながら何を考え，活動の結果をどのように捉え，どのような要望を持っているかを解釈し，理解することに優れている。この手法により，総体としてのクラブ員たちの活動体験の詳細を記述する。

本章では，3 章で利用した過去のクラブ経緯に言及したものを除いた切片を利用した。その結果，分析対象となる切片数は 202，切片あたりのテクスト長さは 148 文字となった。この切片に対してコーディングを行った結果コードは 3 段階となった（表－4）[11]。大コードは，メンバーシップ・作業・（作業以外の）他の（クラブ）活動・クラブ以外での園芸活動・過去の園芸の思い出・行政への要望や印象・造園業者への要望や印象・園芸に関する知識・ガーデンもしくは芝公園の場所，以上 10 分類となり，インタビューにおける話題群を大まかにまとめるものとなった。中コードについては，その下位にふくまれる小コード群と併せて閲覧すると，各切片の内容を捨象した名称となっていることが確認できた（表－5）。

なお，複数のコードが与えられる切片もあるが，単一のコードをもつ切片の比率は 94%となった。これは，切片化，および切片の分類整理が明確になされたことを示唆している。

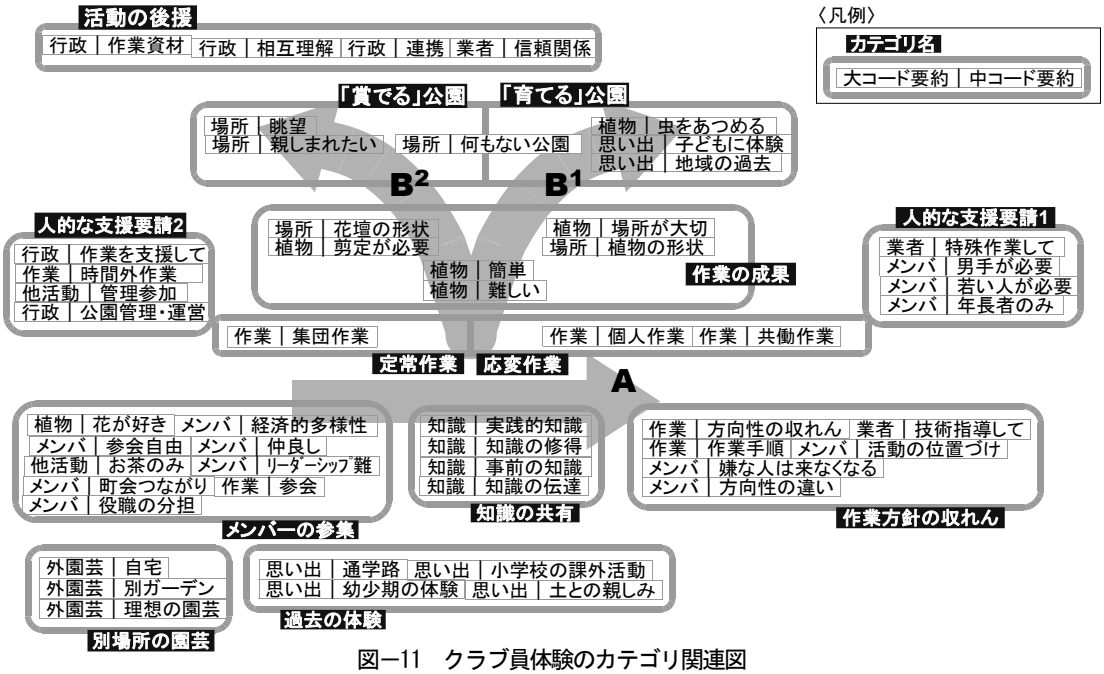
（2）カテゴリ相互の関係にみるクラブ員体験の詳細

総体としてのクラブ員たちの体験を検討するために，切片内容をしめす大コードと中コードの組合せを，相互の関連性に基づいて収集・整理し，組み合わせの集合をカテゴリとした（図－11）。なお，取集・整理の際には，一方では，相互の類似性にもとづいてカテゴリの関連を図示するとともに，他方，カテゴリ全体の布置

表－5　カテゴリ一覧表

大コード	中コード	切片	含まれる小コード		
メンバシップ	仲良し	9	深入りしない	個別に友人関係となる	近所同士
	活動の位置づけ	3	地域ボランティア活動	園芸作業への参会	公募の範囲が不明瞭
	年長者のみ	2	年長者に適する	高齢クラブ員の引退	
	方向性の違い	3	作業の分担	それぞれ興味のある作業	
	嫌な人は来なくなる	4	方向性が合わない		
	町会つながり	4			
	参会自由	3			
	リーダシップのむずかしさ	3			
	若い人が必要	3			
	男手が必要	1			
	役職の分担	1			
	経済的な多様性	1			
作業	集団作業	15	定例化	維持のため	維持作業の負担感
			作業量	作業量の多さ	楽しい花植え
			不十分な作業の後始末		
	参会	8	義務ではない	体調に応じて	気候に応じて
	作業手順	3	楽が一番	安全を考慮してほしい	結果は不確実
	個人作業	4	殺虫	剪定	移植
	共働作業	5	土作業		
	方向性の収れん	6	意見を言ってほしい		
	時間外作業	3			
他の活動	管理参加	2	防災施設の周知	声掛け	
	お茶のみ	4			
植物	場所が大切	15	日当たり	花が咲かない	風で枯れる
			花壇のバランス	虫がつく	
	花が好き	6	可愛い	季節の花	
	樹木の選定が必要	2	かたちを整える		
	難しい	3	年ごとの違い		
	簡単	3			
	虫をあつめる	2			

大コード	中コード	切片	含まれる小コード	
クラブ外園芸	自宅	5	特別なことはしない	
	別ガーデン	2		
	理想の園芸	2		
思い出	地域の過去	3	何もなかった	
	小学校の課外活動	2	先生の思い出	
	土との親しみ	3		
	通学路	2		
	子どもに体験させたい	2		
	幼少期の体験	1		
行政	公園管理・運営	4	評価されている	他部署の事業
	作業資材	3	充分	少ない
	連携	2	現地で打合せ	電話連絡
	集団作業を支援して	2		
	行・業・クラブの相互理解	1		
業者	技術指導してほしい	3		
	特殊作業してほしい	2		
	業者との信頼関係	1		
知識	知識の修得	18	作業から	指導者から
			他メンバーから	外部で勉強
			他花壇への注目	講習会の希望
	知識の共有	7	他メンバに伝える	他メンバに伝わらない
	実践的知識の大切さ	5	知識より交流	正解はない
	事前の知識	4	ある	ない
場所	何もない公園	7	憩いの場	眺めが良い
			イベントにも利用	インフラが不足
	植物の形状	5	灌木の形	木の高さ
			葉の形	日陰ができる
	花壇の形状	4	バランスはまあまあ	地面の取り合い
			地面の形状	見せるための花壇
	区民に親しまれたい	3		
	眺望	3		



図―11　クラブ員体験のカテゴリ関連図

においては，住宅庭園づくりが，庭を「賞でる」「育てる」２つの一連の体験に大別されたこと[4)12)]を参考にして図示した[13)]。以下，カテゴリ関連図を段階的に説明する。

１）クラブ員の参集から知識の収れんへ

はじめに，人々がクラブに集まることを示すコード群を集め【メンバーの参集】というカテゴリとした。クラブ活動の人的資源の生起，つまりクラブ員としての体験の始まりを示す同カテゴリを出発点として，以下，カテゴリ群を解釈し理解していく。

会費支払など形式的な加入ではなく，［参会自由］な土曜日の園芸作業に［参会］することが実質的なメンバー要件であり，クラブ員は［花が好き］で［仲よし］である。【別場所の園芸】を行っていたり【過去の体験】として植物を愛好しているクラブ員は，園芸作業しながら相互に【知識の共有】をする。これは，ガーデンという場所で植物を育てることで［知識の修得］するような［実践的知識］である。この知識に基づいて【作業方針の収れん】がなされる。

以上３つのカテゴリ関連は図―11 矢印にしたがって深化する一連の体験Ａととらえることが出来る。つまり，初期状態では自由に参会し，お互いに連携せず作業をしていたクラブ員が，知識の共有をへて，同一の方針を持ったうえ園芸作業を行うようになる。

２）性格のことなる二種類の作業と支援要請

つぎに，体験Ａの深化と関連するものとして園芸作業の体験を位置づけた。このとき作業は２つのカテゴリに分割された。【定常作業】は，一年草苗の花卉苗植えや雑草取り，花がらつみなど比較的単純かつ分量の多い作業である。この作業は，体験Ａの深化がなくともクラブ員たちの一律・一斉作業として成立する。これに対して【応変作業】は，宿根草や低木などの剪定や移植，土づくりなどの［個人作業］や，数人での［共働作業］からなる。この作業は，気候や栽培場所の子細な状況に対応して，あるクラブ員が周囲のクラブ員を私的に動員して行う臨機応変の作業である。これを成立させるためには，体験Ａの深化，つまり，実践的知識と作業方向性の収れんが前提となる。なお，クラブに対する区・造園業者の人的な支援要請は【人的な支援要請 2】と【人的な支援要請 1】に大別されるが，前者は一律の単純作業の代行，後者はクラブ員の私的な動員に対しての園芸技能もしくは体力をもつ人手の手当てという性格の大きく異なる要請である。

表―6　クラブ活動体験と成果のまとめ

	場所	花壇〈帯〉	花壇〈島〉	遷移帯
空間的成果	景観形成	有効(+)	やや有効(±)	無効 (−)
	植物	一年草	宿根草・低木	
体験と要望	将来像	「賞でる」公園 B2←→B1「育てる」公園		
	作業形式	定常 →A→ 応変		
	作業方針	既定(+)	メンバー間合意(−)	
	参加者	開放的(+)	閉鎖的(−)	
	作業支援	単純作業(+)	高度(技能・体力)作業(−)	
経緯	時期	発足(1)期 → 活動の深化(3B)期		

※易:(+),中間: (±), 難:(−)は、行政側からの支援・後援の難易度

３）植物を見守る２つの体験と公園の将来像

作業をうけた植物を見守り，評価する体験が【作業の成果】となる。ここでは一旦，すべての植物の成長に対する見守りが［簡単］もしくは［難しい］植物として体験され，この体験は，次に２つの流れに分岐する。体験 B1 は植物の成長についての微細な観察である［植物の形状］，さらには活動区画内での微妙な場所の違いが植物に影響を与える体験である［場所が大切］へと深化していく。体験 B2 は，樹木の［剪定が必要］という植物の大まかな形状についての体験から，［花壇の形状］の大切さという鑑賞の体験へと深化する。

体験 B1 における観察の深化のつづきに，［虫をあつめる］植物や，自然豊かな［地域の過去］のような【「育てる」公園】，一方の体験 B2 における鑑賞の深化のつづきに，［眺望］に優れ［区民に親しまれたい］ような憩いの場となる【「賞でる」公園】というカテゴリが布置される。これは，方向性の異なる二つの公園の将来像である。二つの将来像をもつクラブに対して，区・造園業者は［作業資材］など【活動の後援】をしている。

６．おわりに

（１）クラブの成果とクラブ員の体験についての考察

５章で明らかにしたクラブ員たちの体験の詳細を，現在におけるクラブ活動の空間的成果，３章での経緯と対置して検討した（表―6）。

外部からみて最も把握しやすいクラブ活動の空間的成果は，場

所：花壇〈帯〉における一年草の栽培である。目立つ場所にある花壇の端部に一年草の花が配置されることで，公園は良好な眺望景観を保っている。この空間的成果により，花壇〈帯〉の活動は，行政側からの資材などの後援を容易に得ることができる（表－6“＋”）。また，この成果は，クラブ員にとっても一連の体験 B2「賞でる」公園づくりという公園の将来像と合致する。一年草の花卉苗の移植・管理としては半年サイクルの定常的な作業が行われるため，毎期の作業方針は既定されており，当日の参集者をすべて参加者とすることのできる開放性をもつ。これらの特徴はすべて，行政側からの後援を容易なものとする。この活動は，2004 年のクラブ発足期から今日まで続いている。

一方，場所：花壇〈島〉における宿根草・低木の栽培は，眺望景観づくりにはさほど有効ではなく，さらに場所：遷移帯での活動は，視覚的には自然林にとけこむため無効といえる。それゆえに，空間的成果として行政側からの後援を得ることは難しくなる（表－6“±”，“－”）。しかし，この場所での活動は，クラブ員にとっては一連の体験 B1「育てる」公園づくりという公園の将来像と合致している。またこの場所では，作業体験 A の深化ののちに，宿根草や低木の成育状態をクラブ員が判断し，剪定，施肥から土づくり，さらには移植まで応変的な作業が行われている。明瞭な指揮系統を持たないクラブ員は自律的にメンバー間で合意形成して作業を行う。当日誰でも参加できる定常作業とは異なり，応変作業は，クラブ員による作業メンバーの選別，つまり参加者の閉鎖性をともなう。いずれの応変作業の特徴も行政からの後援を難しくしている。この活動が活発化したのは，発足から 7 年経過後の活動の深化（3B）期である。

なお，花壇〈帯〉では，予算化して外注できるような定型作業の単純な労働力でよいのに対して，花壇〈島〉や遷移帯では，応変作業における柔軟で高度な労働力がもとめられるため，予算に比した人的な支援の効果を期待するのは難しい。

以上から花壇〈帯〉への後援・支援は容易である一方，花壇〈島〉へは比較的難しくなる。さらに，遷移帯での活動は公園計画上グレーゾーンであるために表立った後援・支援は不可能である。しかし，人的な支援は難しくとも，行政側はグレーゾーンまでもふくめて活動場所を与え，活動全体に対して資材など後援を続けてきた。その成果としてクラブは，発足から時間をかけて自律性を備え，「賞でる」のみならず「育てる」公園に資する植物栽培ができるまでに活動を深化させることとなった。

（2）本稿のまとめ

本稿は，東京都心部にある都立芝公園における「港区民交流ガーデンクラブ」についての事例調査・研究をおこなった。クラブは 1ha の都市公園内にある長辺 30m の楕円形花壇とその周辺において，毎週土曜日午前中，参会自由の園芸活動を続けてきた。高齢者を中心としたクラブは，毎回 10 名程度で園芸作業を行い，発足時からは一年草苗等の栽培という簡単な作業，後に宿根草・低木栽培という高度な作業をおこなうことにより，公園の景観形成に貢献している。このクラブ員に対して，インタビュー調査と質的分析によって活動体験の詳細を記述した。その結果，定常作業からメンバー間合意による応変作業へと作業体験が深化するとともに，作業成果についての体験は「賞でる」「育てる」という異なる二つの公園の将来像を志向していることが明らかになった。

謝辞：　港区民交流ガーデンクラブの皆様には，若輩者を園芸活動へと誘ってくれたのみならず，各調査に快くご協力いただいたことを心より感謝いたします。

補注及び引用・参考文献

1）林まゆみ・保久良真澄（2009）：持続可能な花壇作りへの市民参加―兵庫県立淡路島公園を事例として―：日本造園学会造園技術報告集（5），134 - 139

2）御手洗洋蔵・愛甲哲也・小池安比古（2014）：札幌市を事例とした園芸ボランティア活動における団体メンバーの意識と団体形態：ランドスケープ研究（オンライン論文集）7，pp.41 - 47

3）大薮崇司・下村孝・小松さち恵（2005）：住民へのアンケートによる京都市内の街路空間における植物栽培の実態調査：ランドスケープ研究 67（5），717 - 722

4）矢部恒彦（2013）：施主ブログに記述された新築の戸建て住宅オーナーと庭のかかわりについての研究：ランドスケープ研究 76（5），732 - 736

5）港区公式ホームページ「芝地区総合支所管内」：https://www.city.minato.tokyo.jp/toukeichousa/kuse/toke/jinko/kokusechosa/shiba.html（最終アクセス 2016 年 9 月 18 日）

6）港区地域包括ケアシステム基礎データ「1　港区の老年人口等の分布状況」：https://www.city.minato.tokyo.jp/chikihoukatsu/documents/sankou1-280708.pdf，p1（最終アクセス 2016 年 9 月 18 日）

7）港区にぎわい公園づくり基本方針「第Ⅱ編　みんなでつくろう！にぎわい公園 2016」：https://www.city.minato.tokyo.jp/kouenkeikaku/kankyo-machi/toshikekaku/kekaku/documents/nihen.pdf，p31（最終アクセス 2016 年 9 月 18 日）

8）港区民交流ガーデン実施要項：https://www.city.minato.tokyo.jp/reiki/reiki_honbun/g104RG00001260.html（最終アクセス 2016 年 9 月 18 日）

9）ウヴェ・フリック（著），小田博志・山本則子・春日常・宮地尚子（訳）（2002）：質的研究入門―〈人間の科学〉のための方法論：春秋社

10），14）佐藤郁哉（2008）：質的データ分析法　－原理・方法・実践：新曜社

11）具体的には，まず切片を要約して暫定ラベルを付与。暫定ラベルが類似した切片をあつめ (1) 下位ラベルを付与。類似した下位ラベルをあつめ (2) 中位ラベルを付与。(1) ・ (2) は，全切片が適切に集合・ラベル付与されるように往復して作業した。この結果，全切片を下位ラベルのみの切片集合，下位＋中位ラベルをもつ切片集合に分類した。この切片集合すべてを包含する (3) 大ラベルを付与。(1)～(3) を小中大コードとした。

12）住宅庭園での園芸活動は以下に大別された。「賞でる」体験：家事労働として園芸を始め，その作業を完遂して庭を鑑賞する一連の体験。「育てる」体験：楽しみのために園芸を始め，草木についての実践的な知識を身につけ，作業に応えた草木の成長を知るという一連の体験。本クラブでの園芸活動は余暇活動として始まるが，集団作業の性質から，定常作業を家事労働のような義務的な作業，応変作業を楽しみのための作業と位置づけて，それぞれから関連していく 2 つの一連の体験としてとらえた。

13）質的分析においては，元データを捨象し縮約するために演繹的（ボトムアップ）な作業を中心として，帰納的（トップダウン）な作業が組み合わされる場合がある [14]。本稿において，コード作成は演繹的な縮約作業である。そして，カテゴリ関連図の作成に際しては，クラブ活動体験の生起する因果関係によってカテゴリを作成し相互の関連性を付置するまでは演繹的な作業，一方，既往研究における住宅庭園での体験を参考として帰納的な作業を行い，関連性の全体像を縮約した。